

平成29年度 宮崎県立農業大学校 学校経営方針及び学校評価表 (評価結果 3月)

教育目標	目指す人材像	平成29年度 重点取組
(1)農場での実践学習により、確かな生産技術と柔軟な経営スキルを備えた人材を育成する。 (2)地域社会や地域農業の課題解決に主体的に取り組みながら、専門性を高めていく人材を育成する。 (3)地域社会における実践学習により、組織の中で自分を活かし、社会で活躍できる人材を育成する。	(1)時代の流れを的確に捉え、持続可能な経営と新たな農業に意欲的にチャレンジする農業経営者 (2)グローバルな視点を持って未来を切り拓くとともに、郷土愛を持って地域の創生・発展をけん引するリーダー	(1)入学定員(65名)の確保 (2)儲かる農業を実現する確かな生産技術や経営能力を備えた実践力のある農業経営者の育成 (3)きめ細かな進路指導による学生の100%進路実現
<b>本校で育む5つの力</b>		
<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">①生産する力</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-left: 20px;">②経営する力</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-left: 20px;">③課題を解決する力</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-left: 20px;">④社会で活躍する力</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-left: 20px;">⑤自分を活かす力</span>		

設置根拠 (1)農業改良助長法第7条5項の規定に基づく「農業者研修教育施設」 (2)学校教育法第124条の規定に基づく「専修学校」

評価項目	平成29年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
学生募集	入学者の確保	【取組】○高校訪問や説明会、進路ガイダンス、オープンキャンパス、学校見学や体験学習等に積極的に取り組んだ。 【成果】○H30入学者の志願倍率は1.46倍で、定員65名に対し、68名が入学予定である。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国では、定員割れが多い中、宮崎は2年間連続で定員を充足したのはなぜか。</li> <li>・倍率が高くなりすぎて、担い手確保に繋がらないのではと意見あり</li> </ul>
	学校PR	【取組】○SNSを活用し、タイムリーな情報発信を行った。 ○県内8つの農業関係高校を訪問し、教育内容の説明や意見交換を行った。 【成果】○農大校見学者数が増加し、志願倍率増につながった。	A		
学校教育	教育課程 (講義・実習・研修)	【取組】○新教育計画に沿って、スムーズなカリキュラム(教育課程)の運用ができた。 ○アグリビジネスや会社経営、ICT活用等の新たな学習内容を実施することができた。 ○学生が組織的に取り組む農場運営や地域企業等との連携した生産物の販売を実施した。 ●わかりやすい授業を目的に授業評価を実施したが、全ての授業においての実施することができなかった。 ●農大の在り方についての検討会の設置を関係課に要望したが、実現には至らなかった。 【成果】○新カリキュラムによる教育内容の充実により、学生の学習に対する満足度が上がった。 ○生産から販売まで関わる農業経営の実践学習により、学生の学習意欲が向上し、主体性や社会対応力が身についた。 ○授業評価により学生の理解度を把握することができ、授業改善に役立てることができた。 ●人的配置や施設整備等教育環境の整備が急務である。	C	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生増に伴い、指導体制や教育体制等で心配することはないのか。</li> <li>・農大の在り方検討委員会を設置し、専門大学への移行や老朽化した施設設備の更新なども含め、できることから改善していきたい。</li> <li>・女子学生が増加しているが、どの程度まで女子寮の受け入れが可能なのか。入寮対策は大丈夫なのか。</li> <li>・模擬会社について、販売方法はどのようにしているのか。</li> </ul>
	担い手育成事業 (高大連携)	【取組】○高鍋農業高校との高大連携で、連携プロジェクト(共同研究)や先進地視察研修等を実施した。 ○宮崎大学、南九州大学と連携協定を締結し、本校の学生が大学での講義や実習を受講した。 ○連携会議は実施することができなかったが、高校の農場長及び学科主任会で校長が講話を行った。 【成果】○4年制大学との連携により、専門学習のさらなる深化を図ることができた。 ○プロジェクト発表・意見発表に参加した全学生が、九州大会1~2位、全国大会3~6位となり、確実に力をつけていることが確信できた。 ●高大連携がスタートして5年が経過し、学科や部門により取組に温度差が生じている。内容を精査し、さらには対象校を広げるなどさらなる充実を図っていく必要がある。	B		
	自治活動	【取組】○自治会の定例会を毎週実施し、学生主体の学校・寮運営に取り組んだ。 ○九州リーダー研修会に参加し、県外の学生との積極的な交流を図った。 ○地域の協力を得て盛大な農大祭を実施することができた。 【成果】○学生の主体的な運営による自治活動で、企画力や実行力、リーダーシップを身に付けさせることができた。	A		
進路実現	進路実現	【取組】○ハローワークによる年間15回の面談を実施した。 【成果】○2年生全員の進路が決定した。 ●目的意識の希薄な学生に対する早期の意識付けが必要である。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鍋合戦、農大祭の他に川南町や高鍋町に貢献していることはあるか。</li> <li>・法人就農した女子学生は、何人いるか</li> </ul>
	担い手の確保	【取組】○法人マッチング(就職相談会)に43社が参加した。 ●就農予定者には、早期から地元関係機関と連携した支援を行ったが、就農支援コーディネーターの活用が十分にできなかった。 【成果】○H29卒業生の就農率は61%であった。(進路状況は別紙のとおり)	A		

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

	評価項目	平成29年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見	
各 学 科	アグリビジネス学科 (農学科・畜産学科共通) フードビジネス専攻	学科目標	<p>○県内の農畜産業を支え、フードビジネスに対応できる柔軟な発想力とスキルの習得</p> <p>○農業経営者の育成</p> <p>○農業法人・集落営農法人等を支える人材の育成</p>	<p>【取組】</p> <p>○高鍋商工会議所や食品関連産業と連携し、「会社経営演習」「商品開発と流通販売」「6次産業化」等、新科目を展開した。</p> <p>○自営就農を目指す学生に対し、青年等就農計画作成の助言を行った。</p> <p>○農業法人の視察や実習を実施し、進路選択の一助とした。</p> <p>【成果】</p> <p>○フードビジネス関連団体や企業による講義や研修により、マーケットインの考えに基づいて知識や技術の習得につながった。</p> <p>○自営就農希望者については、3月6日に認定新規就農者となり就農に向けた準備が整った。</p>	A	A	
		農業教育 (講義・実習) (プロジェクト学習) (校外学習・研修) etc	<p>○食品加工、新商品開発から流通・販売までのフードビジネスに関する総合的知識・技術の習得</p> <p>○地域課題を踏まえたプロジェクト活動の実践</p> <p>○農業法人や食品関連企業での研修の実施</p>	<p>【取組】</p> <p>○南九州大学と連携協定を締結し、大学で「食品の機能性」「食品基礎実験」を実施した。</p> <p>○1年生69名による模擬会社「アグリカレッジひなた」を設立した。</p> <p>○消費者へのグループインタビューを実施し、地域の素材を生かした商品開発に取り組んだ。</p> <p>○さといもの疫病対策をテーマに、プロジェクト活動の取り組み課題の解決に努めた。</p> <p>○農業法人や食関連企業での「自主企画研修」や「インターンシップ」「食品関連企業実習」等、校外での研修を積極的に実施した。</p> <p>○鍋合戦や食の大運動会等地域イベントに参加し、地域住民との交流活動を行った。</p> <p>【成果】</p> <p>○4年制大学での講義や模擬会社設立など新教育計画に沿った教育により、学生の学習意欲が向上した。</p> <p>○「日本一のサトイモ産地復活へ」が全国大会プロジェクト部門で第3位となった。</p> <p>●模擬会社の設立はメディア等で紹介され、学生の意欲が高まっており、早急な取り組みが必要となっている。</p>	A	A	<p>・模擬会社について、課題に挙げられているが設立販売はどのようにしているか。</p> <p>・マルシェでの販売方法(試食やPOP等)に工夫が必要ではないか。</p>
		キャリア教育 (進路実現) (資格取得) etc	<p>○学生個人個人の進路設計のサポート</p> <p>○資格取得の推進</p>	<p>【取組】</p> <p>○県内の食品関連事業所や6次化に取り組む農業法人への就職に向けて情報収集を行った。</p> <p>○フードビジネス関連への進路を見据えて推奨資格を5つ設定し授業や時間外ゼミで取り組んだ。</p> <p>【成果】</p> <p>○年内に全ての進路が決定した。 就農6名(研修後就農も含む、県外2名)、 就職6名(県外1名)</p> <p>○フード関連の資格取得状況は、</p> <p>①初級食品表示診断士3名 ②食品安全検定8名 ③フードアナリスト4級16名(フード専攻以外2名) ④食品衛生責任者18名(フード専攻以外4名) ⑤POP広告クリエイター検定は来年度に受験</p> <p>●2年生は担任を中心に適切な進路支援ができたが、1年生についても、早急に進路意識を持たせる必要がある。</p>	B	B	

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

評価項目		平成29年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
各 学 科	園芸経営学科 農学科	学科学目標	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○今年から「総合実習」の科目を新設し、1年生に作物・野菜・花き・果樹の各専攻を幅広く経験させた。また、計画的に校外学習を取り入れ、農業現場の実態を見聞させた。</li> <li>○学生による農場長制度を取り入れ、学生の自主的をいかした農場管理に取り組んだ。</li> </ul> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○1年生は、進路実現につながる専攻選定の意思決定をスムーズに行うことができた。</li> <li>○GAPの考え方を参考にして、ルールに基づいた農場管理を行う手法が身につく、農場の生産性が向上した。</li> <li>○コーチング演習により、2年生から1年生へ作物生産技術や農場管理の手法が円滑に伝承され、人材育成の基礎となる教育環境が整った。</li> </ul>	A	A	
	農業教育 (講義・実習) (プロジェクト学習) (校外学習・研修) etc	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本県主要作物の生産技術の習得と実践</li> <li>○地域課題を踏まえたプロジェクト活動の実践 (コンソーシアム方式地域連携型プロジェクト学習)</li> <li>○農業法人や篤農家での研修の実施</li> <li>○農産物や加工品の販売スキルの修得</li> </ul>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○農場において、早期水稲、きゅうり、マンゴー、スイートピーなど、本県を代表する作物の栽培に取り組んだ。</li> <li>○高大連携による視察研修や校外学習を通じて、地域課題を収集した。</li> <li>○インターンシップや自主企画研修で、農業法人や篤農家を選定して研修を実施した。</li> <li>○模擬会社「アグリカレッジひなた」を通じたママンマルシェでの販売、農大祭での販売、楠並木朝市への出店等を行った。</li> </ul> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○作物・野菜・花き・果樹の各専攻において、主要品目の基礎的な栽培技術を身につけることができた。</li> <li>○高大連携や地域課題を背景としたプロジェクト課題が設定でき、地域農業に対する学生の理解が深まった。</li> <li>○農業法人や篤農家との交流が深まり、技術習得や経営スキル習得等、研修効果が高まった。</li> <li>○対面販売や直売所での販売により、販売スキルが身についた。</li> <li>●栽培施設も老朽化しており、栽培に重要な温湿度管理ができない状況にあり、学習に影響している。</li> </ul>	A	A	・高大連携において、学科や部門毎に温度差が生じているのか。
	キャリア教育 (進路実現) (資格取得) etc	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学生個人個人の進路設計のサポート</li> <li>○自主的な進路情報収集能力の育成と自立支援</li> <li>○資格取得の推進</li> </ul>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○個別面談や3者面談を計画的に実施した。また、日頃から個別相談を行った。</li> <li>○学生が自ら進路情報を収集し、必要に応じて見学や体験研修を行うように助言した。</li> <li>○日本農業技術検定、農業簿記検定、危険物取扱責任者等、本人の希望に基づき、資格受験をすすめた。また、合格率を高めるため、時間外の試験対策を実施した。</li> </ul> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○卒業生27名については、12月までに9割以上、最終的には全員の進路が確定した。</li> <li>このうち、農業法人就職を含む就農者が15名であった。</li> <li>○日本農業技術検定2級2名、危険物取扱責任者(乙種第4類)3名、フラワー装飾2級4名等の合格者を出すことができた。</li> </ul>	A	A	・無人ヘリコプターの免許取得はできないか。

評価基準(達成度) A=ほぼ達成した(90~100%) B=8割程度の達成度(70~89%) C=6割程度の達成度(50~69%) D=5割以下しか達成できなかった(50%以下)

	評価項目		平成29年度目標	今年度の取組と成果	内部評価	外部評価	主な意見
各 学 科	畜産経営学科  畜産学科	学科目標	○即戦力として地域の畜産業を担う人材の育成 ○全員の進路目標の実現	【取組】 ○先進大規模農家、畜産法人、畜産関連企業と連携した校外学習を実施した。 ○教務学生課と連携し、全員の進路目標の実現に向けて個別面談や3者面談などを計画的に実施した。  【成果】 ○校外学習により、実践的な技術にふれさせたり、経営管理能力の重要性を認識させることができた。 ○年度内には、100%進路実現し、就農率78%と担い手確保、育成に繋がった。即就農3名、法人就農11名、農業団体2名、畜産関連会社1名、進学1名。	A	A	
		農業教育  (講義・実習) (プロジェクト学習) (校外学習・研修) etc	○本県畜産に関する生産技術と経営スキルの習得 ○地域連携型プロジェクト学習や共同研究による効果的な学習体制の構築	【取組】 ○肉用牛及び酪農専攻は農場において、子牛、肉牛および牛乳の生産活動に取り組んだ。養豚専攻は、宮崎大学住吉フィールド、畜産試験場川南支場及び養豚法人で生産経営技術を学んだ。  ○農大市や農大祭、直販所において、農大産の牛肉やアイスクリームの販売および消費者アンケートを実施した。 ○高校や関連企業(香川ランチ)とコンソーシアムを編成し、畜産試験場と協力し、連携・共同プロジェクトに取り組んで、地域農業の課題解決学習に取り組んだ。 【成果】 ○肉用牛、酪農、養豚の各専攻において、生産技術と経営スキルを習得することかできた。 ○プロジェクトに意欲的に取り組んだ結果、昨年に引き続き九州大会で最優秀賞、全国大会で特別賞を受賞した。後輩たちの意欲喚起にも繋がった。 ○生産物の直販畜産物に対する消費者意識や消費動向を学んだり、販売スキルが身についた。 ○高大連携により、高校から継続した教育を行うことにより、農業に関する興味関心が高まった。 ●酪農専攻の1年生が2名と少ないため、酪農における農場管理に弊害が出ている。	A	A	・酪農専攻が2名しかいないのは本人たちの希望に沿った形と思うが、3部門で均等にならないのか。
		キャリア教育  (進路実現) (資格取得) etc	○畜産経営および就職に必要な資格取得の推進 ○国際基準の品質管理体制の習得	【取組】 ○今年度から畜産試験場川南支場の養豚施設で、豚の家畜人工授精師資格に必要な実習を行った。 ○防疫意識を高めるため、口蹄疫慰霊祭で防疫研修や家畜防疫関係講義等を実施した。 ○畜産農場でのJGAP取得に向け、準備(情報の収集や意識付け)を行った。  【成果】 ○多くの関連資格を取得することができた。 2級削蹄師18名、家畜受精卵移植師10名(予定) 家畜商5名、家畜人工授精師24名(予定) ○ヤンマー学生懸賞論文・作文で、銅賞(3席)を受賞し、大きな自信となって、学習意欲の向上に繋がった。 ○4年連続で「良質乳生産牧場」の認定を受け、管理する学生たちの自信となった。 ●JGAPの具体的取組はこれからである。また、一部の学生に防疫意識の緩みが見られたので、防疫意識を強化する取組が必要である。	B	B	